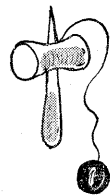


私の保育

—話し合い保育から持味保育へ—



田 口 鉄 久

はじめに

私は四日市市の幼稚園に勤める、いわゆる男性保育者です。大
学進学の不合理的過程の中で、幼稚園教員養成課程へ入ってしま
いましたが、卒業するころには幼児教育とはどんなものだろうか
と、興味をもつようになりました。

以後この幼児教育現場に首を突っこんでしまい、あつというま
に四年目を迎えました。

☒ 壁にぶつかった話し合いの保育

学生時代から私は、将来教育現場へ入ったらこんなふん囲気の
クラスをつくらうという願いがありました。

それは、すべての子どもが自分の思ったこと、感じたことを他

の人たちに素直に、はっきり言えるようになること、また、自分
のことだけではなく、他人のことも考えられる思いやりがもてる
ようになること、そんな子どもたちのいるクラスができれば、と
思っていました。

そこで、「おとなしい子ども」は活発になるように、「無口な子
ども」は人前でも平気で話すことのできるように、「乱暴で迷惑
ばかりかけている子ども」は、もっと思いやりがもてるように
と、それぞれ指導することを考えていました。

初めて担任したクラスにいたK君は、俗にいう利巧な子どもで
したが、クラス一番の乱暴な子どもでもありました。そんなK君
をもっとやさしい子にするために、私なりにいろいろ話しかけて
いっても結局いい方向へは向かわなかったため、皆の前でK君に
ついて話し合いを試みました。私は、この話し合いの
なかで、K君の悪い面がたくさん出されるであろう、そして、こ

の悪い面を指摘されるなかで、K君は自分なりに「もっとしつかりしなければだめだ」と思うに違いない。また、他の子どもたちは、K君の悪い面を指摘するなかで、どうしたらK君がいい子どもに育っていくか共に考えてあげるに違いない。さらに、悪い面ばかり見いだすだけでなく、いい面もみつけ出すであらうと考えました。

話し合いを始めたところ予期したとおり、K君の悪い面がどんどん出てきました。

「なんにもせんに、たたく」

「スカートをめくる」

「いすを持ち上げて投げようとする」

などでした。そこで、私は「こんな悪いことをするK君だけど、どうしたらいい子になるだろうか」と皆に聞いてみたところ、

「別の幼稚園へ追い出す」

「幼稚園へ来させない」

「みんなで、たたく」

「木にしぼりつけておく」

などの答が返ってきました。しかし、子どもたちからは、これ以上の解決はどれだけ待っても出てきませんでした。

結局、私の口から「K君が悪いことをしようとしたら注意しよ

う」「みんなで、いけなさい」って教えてあげよう」と言わざるを得ませんでした。それでも、その時はいい話し合いができた、K君も少しは自覚して変わっていつてくれるに違いないと思っていました。

同じく一年目の保育のなかでとりあげたもので、「かわいそうな象」という戦争を非難する絵本がありますが、子どもたちは、戦争が激しくなると、動物園の動物をつぎつぎと殺さなければならぬ悲しいこの物語を目をうるませて聞くのです。私も含めて戦争体験のない子どもたちに、戦争は悪いことだ、やってはいけないことだということを教えるためにもこのような絵本をとりあげて考え合うことは必要なことだと私なりに思いました。この絵本を読んだ後で「どうだった？」と聞くと、「かわいそうだった」という返答が数多くありました。「戦争っていいこと？」と聞くと皆が、口を揃えて「悪いこと」と答えました。私はこれで、自分なりに戦争の悲惨さを子どもに教えることができたと思いいませんでした。

☒ 子どもの持味をひき出す保育

そんな「話し合いの保育」を続けていましたが、なんとなくしつくりいかなない面があるような気がしてなりませんでした。

先ほどの、乱暴なK君の例では、話し合いと言っても全員的气氛が参加してでの話し合いでもなく、K君自身も反省するどころか、逆に皆からはずかしめを受けたと感じるかもしれません。

「かわいそうな象」の話にしても、子どもたちは、はたして戦争を憎むべきものとして受け止めたのか疑問です。おそらく、苦しんで死んでいく動物をなんとか助けようとする動物園との美しかかわり合いに感動をもって聞き入っていたのであったに違いありません。それなのに、私は無理に戦争は悪いことだと結びつけてしまっていました。

こんなわけで、私の保育は子どもたちを全体として「望ましい」と思う方向へひっぱっていかうという無謀で危険なものでありました。たしかに、どんな子どもでもはっきり自分の要求を言えるようになってほしいし、乱暴な子どもたちは思いやりのあるやさしい子どもに変わってほしい。また真実は真実としてつかんでほしい。しかし、それは保育者が子どもたちに話し合いを意図的に仕組んでいくなかで、子どもたち同士が変わっていくというような単純なものではないことを最近になって感じはじめました。

乱暴な子どもは、その乱暴さのなかにある積極性、行動力などを保育者として容認できる範囲内で容認しつつ、明らかによくな

い行動は、あっさり禁止するぐらいの方が、その子どもが生き生きしてくるよう感じるようになりました。

また、無口でおとなしい子どもを、はたして何でも言える活動的な子どもに育てあげていかなければならない必要性があるのかも疑問になってきました。無口で静かな子どもはその子どもなりのおだやかで好かれやすい性格をもっています。そのおだやかさが、将来よい面としてその子どもの人間性のなかに表われてくる可能性が十分あります。私自身もつとその子どもがもっている無口な面や、おとなしさを理解し、大切にすることこそ必要なことだと感じはじめました。

涙もろい子どもは、はじめは涙なんか流さない意志の強い子どもに育ってほしいと思っていました。が、しだいにその子どもも流す涙をとろとろのものに感じるようになってきました。

ちょっととした感動的な場面に出会っても涙が流れてくる子どもは、弱々しい感じがするときもありますが、やがて成長するにつれ、おそらく他の人の苦しみや悩みを敏感に理解できる人間として育つ素質をもつ子どもであろうと思うようになってきました。

ひとりひとりの子どもをみつめてみると本当にいろいろなタイプの子どもがいます。それぞれの子どもを将来を見通した上で、今の子どもの持味がひき出せる保育こそ、理想の保育だと感じて

いるのです。

☒ 保育者の持味が生かせる保育

私が男性保育者であるということから、よく「先生のクラスの子どもたちは大変元気でしょうね」とか「他のクラスの子どもたちとどう違いますか」などと聞かれたりしますが、とりたててクラスの子どもたちのどこが違うのか、はつきりしたことは自分では今はわかりません。ほかとそれほど変わらないようにも思えます。しかし、保育のなかでの子どもへの接し方などを比べてみると、やはり大きな違いがあるようです。

一昨年のこと、一年保育の修了も間近い三月のある日、

病気で休んだN子ちゃんのようにすをうかがいがてら、N子ちゃんの家を訪ねました。お母さんがこんなことを話して下さいました。

「先日N子が先生とはじめて遊んでもらったと、大変喜んで帰って来ました。あやとりを先生とやったのがうれしかったようです」とのことでした。

私はいつも、どの子どもとも一生懸命遊んでいるつもりであったのに、三学期も終りごろになって、はじめて私に遊んでもらえたと感じた子どもがクラスにいたことを教えられて非常にショック

クでした。N子ちゃんにとって、この日私と一対一であやとりをしたことがはじめて先生と遊んでもらったことだったので。こんな調子ならば、おそらく私の保育での一度も先生と遊んでもらえなくて幼稚園を去っていった子どもが幾人かいたかもしれないと思いました。もしかしたら女の子の多くはそんな不満足な気持ちがあったのかもしれませんが。それで翌年度から私はできるだけ女の子とも一対一でも遊べるようにと、四月からあやとり、まりつき、パドミントンなどに取り組むよう努めてきているつもりですが、はたしてそれで子どもたちが十分満足してしてくれるかどうかは今もなお疑問です。

私のまわりの女性の保育者をみてみますと、ことは使いのていねいさ、物腰のやわらかさ、子どもの服装の乱れなど、細かいところらにまで気を配ってあげられるやさしさ……など男性である私にはとても及ばない点が数多くあります。スカートの飾り紐がほどけかかっているのを見て、きれいに結び直してあげることや、とれたボタンを糸や針を出してきて付け直してあげること等、なかなか私には気がつきにくく、かつできにくいことです。それが抵抗なくできるのは、やはり、女性である保育者の持味かと思えます。

ところで保育者が男性である場合、どんな点が子どもたちに受

け入れられるのでしょうか。私は……というより男性ならばポールを園舎の高さの二倍以上にまでけり上げることができません。竹登りも一番上まで登っていきまじし、その上で回転することもできません。力もあります。子どもたちは、これらのダイナミックな動きを目の前にして驚嘆の声を発します。また、子どもが自転車などに乗っていると、私も乗りたくなってしまい、「オーイ、その自転車貸して！」などと言って乗り回したくなったり、飛行機やヘリコプターの音が聞こえると園庭に飛び出して、空を仰いでみたくになります。男の子の気持ちに通じる何かがある男性である私は流れているのでしょうか。こんなところが男性保育者の持味と言えらるかもしれません。

いろいろなタイプの子どもがいるように、いろいろなタイプの保育者がいることは、むしろ望ましいことだと思っております。男性保育者であるがゆえに子どもを気持ちよくつかむことができない面があるのは、女性の保育者であるがゆえに子どもを気持ちよくつかむことのできない面があるのと同じように、やむを得ないことかと思ひます。むしろ私は男性である自分にふさわしい保育……これを求めていかなければならないと思ひつています。

今思ひかえしてみますと、私の一年目、二年目の保育は子ども

の近くまではいくけれど、それ以上中へ入っていくことのできなかった保育だったと思ひます。ままごと遊びに入つて子どもたちのようすをうかがつてくるとか、けんかの仲裁に入つて互いの言ひ分を聞いて、どちらが悪いか助言を与えるように、子どもたちから一歩離れたところで保育をしていたようです。

三年目ごろになつてようやく子どもの気持ちがあかりかけてきたのか、子どもたちがする「陣取り」や、「はじめの一步」などの遊びに私も本気で参加できるようになりました。

「陣取り（鬼）」では、私も子どもの帽子を借りてかぶり、時間のたつのも忘れて一生懸命相手方の子を追つかけたり、追つかけられたりできるようになつてきました。「はじめの一步」も子どもたちと同じようなしぐさをすることに何ら抵抗を感じなくなり、子どもたちも私の存在をとて歓迎してしてくれるようすです。

子どもが好いで好きでたまらないというわけではありませんが、子どもたちの前に立つとなんとなく顔がほころんでしまひます。心もなごんでくるのです。昨年度隣組の子どものなかに、私を「モテモテ先生」と呼んでくれる子どもたちがいました。そして私のあとを追つかけたり、おしりをたたいたりしてました。すべての子どもに本当に「モテ」る保育者になることをめざしたいと思ひます。

（四日市市立泊山幼稚園）